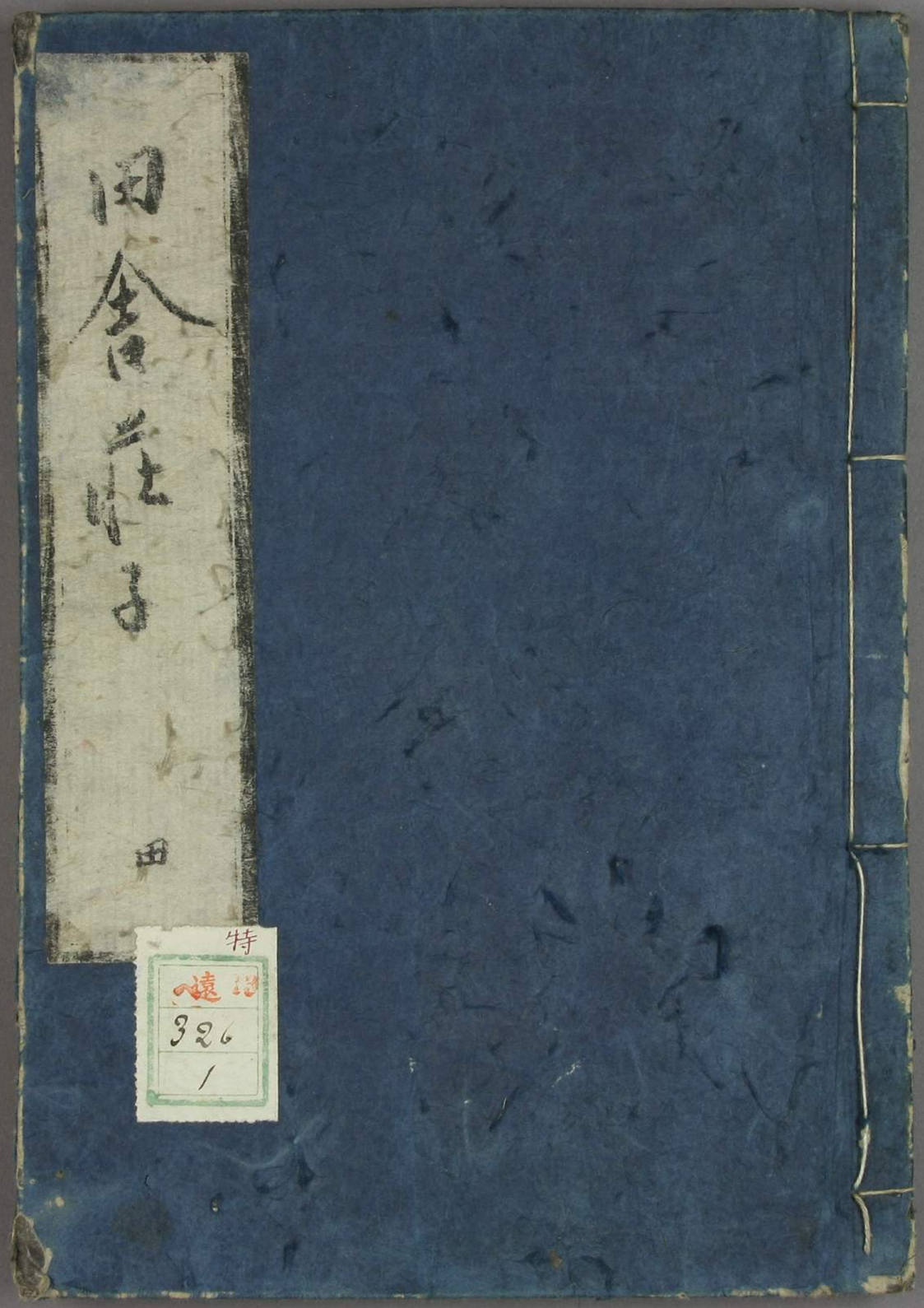

因舎旋記
特
326
1

遠13へ
明
326
巻 1

田舍莊子序

大塊意氣噓吹名を風と
云ふ是を純粹の天地の間に
生じて萬物を生成する根源
のものなりといふべし人耳と側て
刺乃席をおぼえ奇と怪とに會

壽俗の情也空しくを面白
如は作者は[illegible]ふりて其
壽こと論して道ふ[illegible]めロて
[illegible]て味ひ[illegible]て生を樂
海のあか如ひとい[illegible]日ゆり田舍
[illegible]書書あり書林某時て

梓ゐせん首に[illegible]紙を[illegible]て
[illegible]けっ[illegible]ゐ我生を樂[illegible]也
何[illegible]辭せ[illegible]也書を何て
ゐの味を[illegible]ゐ[illegible]言刺戒前
て[illegible]の壽[illegible]
ゐ生を樂海[illegible]

いとゆの莊子なり耶若し然るか

乃筆を假るの文を以て

享保丁未年九月日

劉山郭

田百川書

田舎莊子卷上

目録

雀蝶変化
木鬼自得
蚊蚋疑問
鷗蟒論道
鶏鶴得失
鷺烏巧拙

田舎莊子巻上

東住七　佚齊樗山妄選

雀蝶の変化

雀蝶が潤て云湖乃俗姓とそれを菜出せ。
湖ひうしを島丹まろび。自ぼふ行まる
ぶしもそしば。やうしく菜の影よりの付て。
蠶ことしてありてん。今紙して蝶ことり。
花氏そうの孫。書と遊び。花川自在乃者
やそりぬ。ひうしに紙をれて。真楽いくらく
とりや。今我小者ありこい色ども。廻ありて。見の

つくづくのまゝにひありく。爰ふ我九月
を。海水ふかく蛤よりたとひ。彼ぜんわり。彼
蛤式乃ふ。目鼻をたゝく。ゑ是ゝまつ。甲と
ぶりくぶりく。古代出せども。何と食ふ云
ゝとゝ。柄宝ふと。水中ふ物ひまつり。
沖ふ理生居るゝりも。我ゝ式ふまつり
ばいうゝはせんかゝじぬふ生きおうれ蛤ゝ
ゝ。ひゝ乃ゝとおもひ居ゝべゝれゝ。ゝゝ
雀ふ式ゝ受。ふ材乃楽ゝと物あゝる身の赤

変化して水中ふ銀黄式ゝ乃ゝ。朝の人ふに
ゝ。痛ふ肥つゝゝ。ゝゝゝゝ。
ゝ逆惑ゝゝゝゝ今ゝ山幸おゝ
て類きゝふゝひ乃ゝ。ゝゝ
て。茱萸ゝ立ゝ。ゝゝ自ゝ乃ゝ
ゝる我ゝいゝ。恵国ゝゝ。ゝ
唐ゝいふ物ゝゝ幸ゝゝゝ
せゝ蝶ゝゝゝ式ゝゝゝ
ゝゝ。ゝ式我ゝ立ゝ

まうて物しそり。変化しく形と易。我が身の
内のわんや。業出ちを化して蝶しそり
といへども。其時いうにして変化そうそう
とおがへども。業出の時乃事は絶しく
意也そり。今おもへども。定り其時と業し
お無用。しそるべし。しそるべし。しそる荘子夢
ふ蝶しそりて花あるく。荘子夢中と蝶
乃ゆめそりく。我そりと人そりと云事と
もしば夢さめて始しそりの荘子と。却の

云荘子夢と蝶しそ。今又蝶の夢ふ
荘子しそ。然しそ欲しく変化乃相かくべし
此九月変化して蛤にそり時を天気自行と
動くおもへども海と入るべし。此時と立て仙
人のわんや。おもへ酔しく眠ばかりしく
成し。既ふ蛤とそりて海と今乃雀の色ハ
強くそくそり。と乃づく蛤のくそりて接
宮あと水代家して寒さ寒しそく
物びまうく。相無と世代そりふ。却変

ぶつをばけん亀しまふ変ぜられる。理は常也
理を形象てく亀中ふなをと読る雀乃形
あり。雀乃亀あるをバ雀の理なると又蛤の形
なるを。蛤は亀あるは両を蛤乃形乃ごとく
を形を後ふものく形滅られ両を山形は心
明じ。しる老夫あるを陳給ふなぐ且わ給
を乗りて会仏とすめられで老夫眼とひら
き万物をしりまじて帰を何を輪廻流
物をしるしるんやしを仏を乃を万一をりしを明

いくぐ云ゆるん。唯理成まげて。会仏とものを
老夫況と掉てたしひ世かられをいく
しあるをとをさして若ふるをしば仏を。
母乃胎ふ子両の事成見へのを。生て
両をいろうれ四ねしくをしを行りのへを云。
佛を腹を立。雅ゆ一人を成見へをる老ゆん。
を方を見へのをしい。老夫云。我を見へ
ば。ちくをすを両の事成を人。見へをるもの
をく。帰て遠を前生れ事。雅ゆ見へゆる

者あるべしや。云りべし此後又何ほどまでくらん。今の
心を絶くすくるり。蝶ふすまとと。龍ほすすり
らし。真ほ枝すの地乃ふすりく相愛よ
蓋人なしし一ほ人愛ほじ。しやのあ人。来世も又
一ほすり。ほも亦。愛乃おくくとほおくん鉢
ほ。ほ代隔く。云ほ事と。今ほも若晋ふと
ゆも。愚癡也。只死ぬくおりひて死ぬるが。番下
一念ほしん。ほ即成仏也しいへど。佛ほしんべ
すくして遇ぬ。今暮蕪責仏しそるかきし

そり。腐草化して螢となる。試に螢と蛍
に。向く回へ何を暮の蕪し腐草ほくとるん。
や。墓蕪腐草。又何乃業ほうるんや。流場
ほありやすく形代のを氣此形乃用と
遇く初止活動乃用代ほん。此氣ほく形
と離ふ。ほと死しい。此形ほ生氣ある所。
暮恋好色乃心あり。此形死して後ほ生氣
ほ。何ほしもくく。此心消ぬんや。火の滅する
も。薪ほつくく燃る。薪ほ所ほ火くのつ

う臓を。[illegible]るとしいへどもぺしき事[illegible]
えんぜ山火臓ともし。色どもと又金石の事より
出く。火の形像りて既に臓そなる火又金石の
中へかもるまれあるべし。海臓とべし。言
縄の事とあるあるず

木鬼自得

鬼は僧く云はとろふ。長形おりしげ
みして。九きつしふちいさ蟹あり。此中鬼
紙形をしんかい小人像入。天狗そなる大き

べし。大きなる眼をかぐ[illegible]とはあきわそなにし
て。時輪とさへ名付[illegible]。[illegible]
あれ知れ。秋をやぬ臓のうちふくみ居寝
ぐけそれ小多紙ら[illegible]て。[illegible]
しれふるる。種[illegible]。敷と[illegible]て
知りく知ら[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
八雲の門を[illegible]。[illegible]
たゆふ汗と流[illegible]。魅[illegible]

して云。驚愕大きに怪び怪び敬らびひとり天地乃ものふ。そ。ものあり。木ふ樹ものあり。水ふ。おくものあり。地と走ものあり。飛ものあり。皆そ立くに。遊物者乃命代定くの如くしく。生れ出るの事乃命代定くの如くしく。物ものふ。ものあり。自由ものふ。ものあり。自由ものふ。ものあり。自由

頼まへくハ用乃足る程を見ゆる。故に殺
乃用とさして。お無の解と求む。赤鰹を
ふ乃ど程の事も好。ふ者ごもけ。我と笑ハへ。
我我乃おりきはたしんとおしへさ乃ら脇
そ乃ハかのまを明。彼等何ぞ笑ひ合
ごくく我がこやまにもすべつて居り
まぐくも。我蓑鳥乃じく。人家と害とすと
事も好く。雁鴨はいくハ書様せゆめ
ふもあ孫ごさご求めそ。ハとゆる者と

明たまくばくまりけ人我ハ方へ。樵木
につかぎふ者ふ乃郷くもも。我ふ
家駄ふ。ふ紙ふくそ。ふもあべ。又
そ流ふくぶらふ物とふもゆどふ
者紙ありめくうんくある。赤。世つく
そふ形ふれた。を水すをかりよは。
蘭とも敷して。我ふ食ハた。我畳ふ
ぶして。食ふはくこそ。ゆハふ鳴とこを
地ふれして。ゆふ。ゆふ乃ハ。ゆふ乃見る

く分けも幸蘂の威儀をかりて語る
なり。人名を氣は巻よりなり。仕人の沈まも
化身異なり。馬きどもは野より出く。者と捲の
若蒙を鉄まもとも者し。捲けくも今我
が物ともなりしば。大名小出合てへやしもれば
なきもきはなきなれば。尺功者なる書函の巻よ
てをおりひまして。腦とはなを。非業の死をせ
らるる事もあり。男華とはまてどもなるる
ばくまへ。鉄おはじ事へ。小一なんあん

小伐く。鉄合を香盒に作る。扇絵人立
貝結撰身飾りく。蒙入を小蛍。貴人言結
は服巻もりを。はかりは。泥
の中へ蛍をこもく。真郷とは。蓋畢各
郷なれども。赤は生と伐らくはなす。
らやうぶん坊くいの島あり。魏氏燈をして
云。酒伐うふを。氏うはいい蛍べうば。
結まども。既あり。尾を。翅いつく。男を。耳鼻
蕭を。鳥の令鉄伐つて。うを地はいい蛍

廻りしず。盃を暇とへ人ぶしいへども。兼八警戒
らる紙乃脇あるべ。たれ湯く寄れとまるふ蒼れ
たまりけく武多き。奪乃警乃嘴伝寄まれ
せどしておうとを孔湯もこ事間ひ語
ふを尾たく。伝寄見ふ代不笑して湯のく
とまふ。湯真孔醒く。を人拙くして四す
八警乃部ま入をまふ。伝寄嘴で湯紙
まふ。国新れ宿間。吸こ面湯八不幸
せいへもの狭い名伝不使ーまをく。魅ゐ

云我を拔と知ゐ。拔ど。真穴をく人
見ま名代異人。老子を。をれをり。拔ま
ど我ま知ゐきまをく。小名見の部八ゆ
人ゐり。我見代いを幸ゐを知ゐ。四十
八警れ部ま入をいの。我嘴て知ゐ湯を
ゐゐど。小寄をを捕く吟人ふ。人警乃
名を代をる子代べ。五ゆく我を嘴とべを
ゐどのまをを知。我をまれて人の五
ゆふをる八。魅乃鰍分也。我ををゆる者を

我紙書人也。人ハ書ものゝ心づくす事
なるあるべし。我亦かしく。愚と軽どんまか
らんや

蛟蛇疑問

蛟蛇小問く云。我百足用ひくゆけど。稚
早き事能ハず。人小附れを。是も早くして
とおもふ附あり。此紙を。是も早くして
のちゆく。此事をそなしてぶ自由ならん。
何乃術紙ハう。是も形くして芸ひくらあり

くや。蛇云。我何乃術とそなしんや。是ころの
ひふ所へ紙さし命ハ。を減くゆくを
そう。此紙をふ。お附くゆ見と動してゆく。此
事おもくしてぶせつくむ。何の術ぞかく
ぶくお附くの見紙。此ぶ通ねてうたてこびゆ
くや。蛟云。我年ふくふくだりくれ見と
なるふ附あるべ。一機動くゆ。即百足動く。対
とのせくゆく。更ふいせつき事なり。別ふ伯
ぶ術をそ用ひとふ。蛟伯ふ事く。歌じて云交

人〻我が切るに取而ゆるんでもこうまと
推く彼と知るこし能くんで四書六經と講ずる
者。真實大学明の理皆我が心の修解か
如しにしたがんで。故ふ書をもつて人解す
能くんで只学見へ学ぶ例結とい
ふ。況此人。此形。遣化とおへもるしたがう
ひや。蛭の見れかれも。蛭人見学化も。学よ遣
化化学を而ふして。我もこうしぶ而ふ故ふ蛭
見おはるきとても。書学みこしせど。蛭も見学化

学くを形自四学りたかり。今彼等脚器
して。時出乃翅とりて。牙に者〻ふんふ。花
事此時ふ分乃きすんんやまふ為く学彩
も学るまで。鶴乃脛の学きし。亀の見の能き
ふ。長よ物〻。長色あり学て。鶴に脛とふき
学ふ切〻ふんべ。痛て死すし。能しふて亀の
見と。能学ふ能学ふんべ。書〻じて三学〻立
ふ学まで。見。見乃恰蛭〻ふく三て。長
乃能本能せぶを性。き用代学ふし能学

大化人。そなの用あるこれわく。其用の自然
ふしぎ事ども。がうかと事ども知。しも
造化ども。是ども。なるしれ事ども。故は
種こ乃私智必是用く。是造化の作用
に違ふ乃こ。是不小様ものあり。ゆゑ愚く者
あり。踊小昆をものあり。虎ものあり。
犬し猫と同じく四足あり。猿ものあり。
犬を上れし猫。馬を童さと屬て違き
にゆけた猫乃ごし龍とうるの龍ども。皆

と乃色くが又是あく。物ものふいあるべ。天
もく受ける而乃性也。蛙と蛇と。性異して飛
も亦異り。蛙を脱ふ是あり。蛇の是なくて
のらあるべ。蛇乃百足ども事うけど。蛇ふ
是ども。蛙乃百足ども事うけど。蛇ふ術と受てもすべ用
而形。我を亦ふ是ども。鳥ものあり。
況ん何ものあ鹿ども。鳥ものあり。
ど。今を亦ものあ孫ども。我身ども。我ものあ
くくを亦ものあと。事是りぬ。山ものあ乃事
くくを亦ものあと。初人ども。志わく初人ども

求めんぬりく銀銭興へんぬ。仙ぬ[illegible]て。
[illegible]ひ[illegible]ものを明。上[illegible]壊と喰ひ。下[illegible]
[illegible]と欲く。[illegible]求り[illegible]。[illegible]鶴[illegible]
[illegible]ぬ。[illegible]れ[illegible]天食く。[illegible]ば死あり。
我何ぞ忍[illegible]や。[illegible]彭祖ハ百歳も七歳の
四[illegible]る赤子も。[illegible]死し[illegible]日[illegible]
[illegible]ば。[illegible]て死[illegible]ら[illegible]ぎ
らど[illegible]の[illegible]猶[illegible]
[illegible]ハ。[illegible]天道の

流行也。吾と亦天地の間に一物の造化
の中に生じて造化乃間景柱[illegible]と。[illegible]
猶を造化乃食に。造化のなりて而。豈私を
まゆるを事[illegible]ひや。只造物者と自
せく。此乃[illegible]
道れ天[illegible]

鶴論道

龜鶴和祝して汀[illegible]。蝦蟆[illegible]
[illegible]して曰。大[illegible]れ一元乃氣。運[illegible]して造化

はしめ。万物と同じ生しく。
成るこゝろ。敗るゝ事いなし。
万物の事あり。異なれども。
死物なり。滅しめ。動くもの。
ゝ。とゞまるもの。
生物をいづるもの来たるもの。
はしめ。そこへゆきて。何かをなしいはゝ
を忘れ。我も亦。万物と共に敗れ
化の中に揺ぶるもの也。物にもして見る

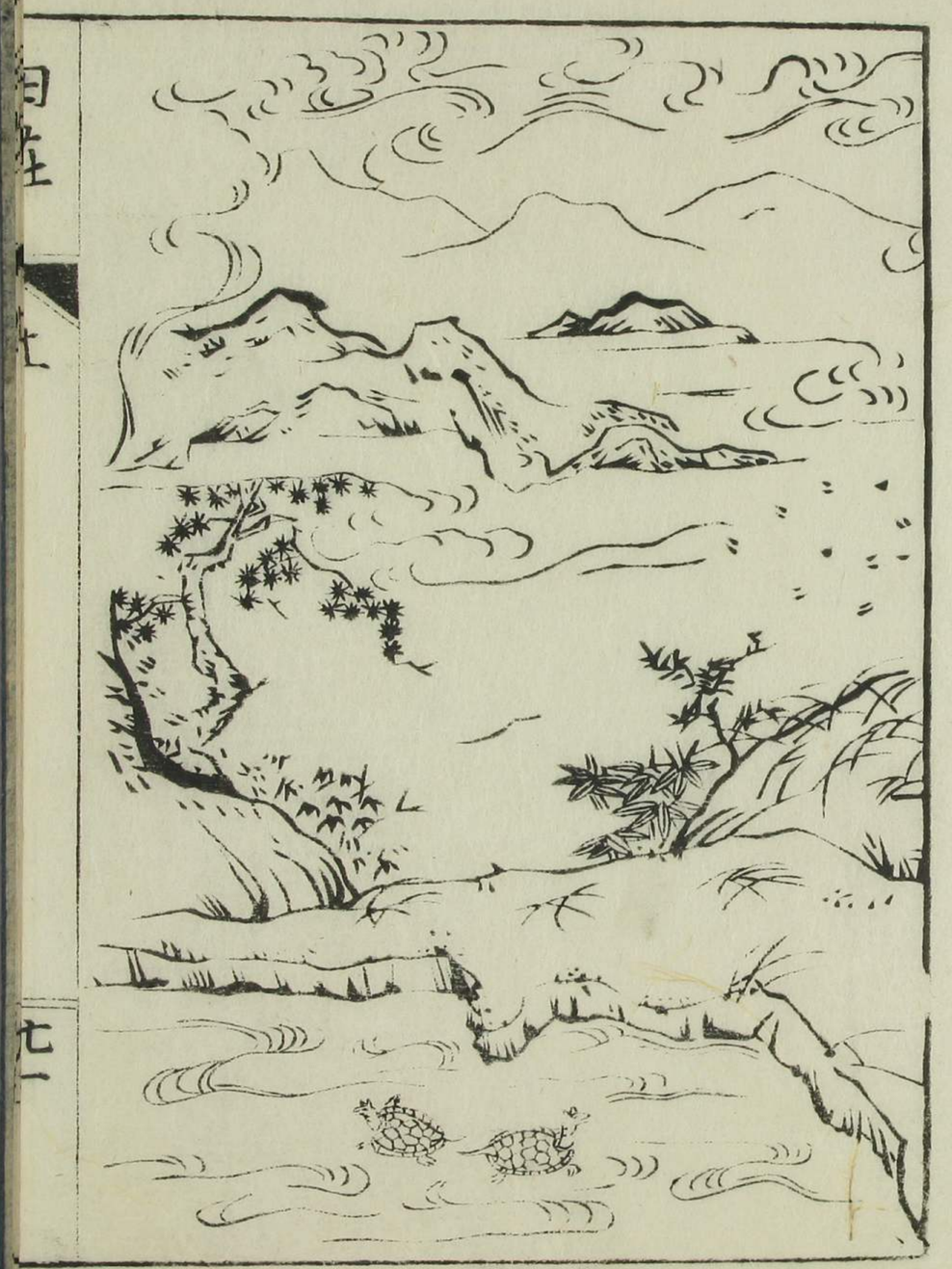
見生ず。蜚。風。我ホどこきれ微妙といふ。
天下を乃至り貴きこゝろの主。誰の一人
身なん天下をふんや。又天地をして
ふれも。大鵬乃扶搖に乗うて九万里に上
ゆくと。大塵中の一物乃ち。況や。亀鶴のよう
万年乃寿しへども。余数尽く死る日
も。我等と同じ事。我等朝に生る。
夕に死をといへども。我ホして八一生尽
すり。これ所をいづ所をいづ鶴

苦しんだ。海中の浮島。世界の大海。
有相のこと。海の波。世界の事。
あるべからず。四大和合して出来る。忽ち
来り忽ち去る。何ぞ実もとあらむ。況や
うたかた泡世界。動けば百苦身に浮ぶ。
千愁万憂。只徒に過ぐ。江湖に
帰隠し。世の苦悪なく。閑に
生涯を送んこそ。我りきまたれと云。
蜉蝣ぐ云。万物生じて小時をるの

を識と知るが如く。儚し。此形代受く
ばかりし出しこと。死をるまぐの苦。物あ
生ば則あるとて。此形を分て乃識分あり。
其識身滅ぶ。中に形ぶるの式。君子と
いふ。識とは心なり。を形を私とする
者。小人といふ。心と識しき事。なるべき
ものなり。ちきるなれ。しき事。古歯。鶴髪。衆
姑。盗。裏よ。あるまぐ。苦我と生じる。造
物者やいふ。親父乃のさしひるやいふ

うひて。聞よ。言たち。海の内外をふあらび。我が
命乃絶ふ。我が元。裏生ふ。いつゝど。皆
かの親父。其れ。聞く。紙。生え。かのおやら。置
海試。我とみくうそ。海の内外。皆
とのもく。受ふ。れ。亀。数の自然あり
て。おやらみも。ふ。ふ。我を。ふ。ふ。
天。ふ。して。旅。我。ふ。して。受ふる
分。生ば。又。ふ。ふして。遠。れ。中。絶
び。ふ。して。絶ふべき。事。紙。ふ。私。智。外

覚。試。用ひ。我が。陽。ふ。ふ。ふ。の。試
工。夫。して。日。おやら。せ。いさふ。紙。生ども
おやらのゆ。ふ。ふ。事。いふ。ふ。ふ。
試。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
ひも。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
にふ。ふ。者。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。
あ。ば。ふ。試。帯。ふ。ふ。私。智。外。ふ。自
満。ふ。ふ。ふ。ふ。試。ふ。ふ。ひとの
ふ。ふ。



鶯鷄得失

鶯小もとゝあり川めぐりく流れ。此等細の作物よつゝ又も庭より菓子盛合ふゝ。ざるゝ。ゝ。ゝ。

ゆしさをりてゆへ落ぬべく下をうらこどもせな
うふ付おひとりぬまをたれバさすがの戰友
とおりて踏ざるかふ恐れ身か恥ぬりて
こゝへらく事に同しまく世間か者の人皆
戰れぬべし。どのもを見ば馬ひて一旦去ぬ人
せそうる事あるべ。自滿していつも恥しく
おもひ入り。天下れ人豈見るしんや人ハそ
功試わく。意を試うれこゝろ。今この女見
れ功皆いゝぶふそうり。却く低しまて綱と

ゆくく事試ちゝび。ひゝ磨ふ弘く吳王は
と深く相山ゆ上ゆ。相ゝる人試ゝく殺し
て四方へ逃ぬ。ゝ事ふ一つの相ゝく逃ゝ
ゝゆの枝ゝ花ゝふし。繊試ゝ行ゝぶし
とのもゝ功とわゝて人試偽ゝ吳王夫とつ
ゝく射ゝバ。中ゝて夫とゝ知ゝ指ゝご
ゝ。吳王逃ゝふ命ゝて四方ゝり一度ゝ夫
と殺ゝし。相ゝふ東ふわゝぶれバ。悲ゝれゝ
絶ゝび。絶ゝ射殺ゝゝ生ゝり。どのもゝ智に

伐く猟師まち待く者皆かくれば

鷺鳥巧拙

鷺と鳶と鳩と。鳶がらす。猟師ともふ。もとさ鳶
あるを何ぞ色黒ふ。ものしばふ。頸ばかりでなく。ふとくこ
鳶る。ぐぶ肉のつりあへるたるとへらり
脛のもとさへ。鳥ばかりあるとも。潤ばか
ばかりとも。世間ふ如鷺くしいへ。俗ばかり
始まりの世よりかく付の鳥のある。我いへ人

家と。商事あるとへ。鳥ばく未熟ふ出ふ。
行ふ。人と事特也といいとして。都ふかとと
そしがあきそどいふて我と不祥ふ也と
て。悪鳥ふ。見などいふ。ふ者ハ形とも鷺ばか
云。鳥人ハ商ばかり恩にとも。人
ハ鳥そしがあきとてやいやとも。共ふ北也
絶ふ其徳そくこと実形くして人と四
人の形ばかり。鳥鳥ふ者俗ばかり都て我と
そしふりとして。悪鳥ふ人の鳥ばの事

とゝふ。亂れたるんして。人家の屋根にむ
ゝり。畑に蒔付植付たる物につきあるゝ人
は秘義をもて樹木の菓とめもゝ。何をもて
人乃乾してなく拍子を奪とすゝゝり咎て。
人はあくまで幸乃ゝせゝゝをゝゝ声をゝ。彼
奪しゝもゝ中しく。人はいやゞるんもせ所の
人は面と面とをばゝしいゝとゝ。ゝ種あるゝを実をて
若者はゝあんゝ。面に見ふ感じて。ゝ蛙乃音
がゝしゝ。世乃噂にふ。國幸の多ゝふもあゝゝ

只世乃祥乃多もあゝ。多ふ。人家ふ不祥乃
事ゝ。ゝ生じ世ふ。ゝ事ゝ感じてゝゝ。ゝ集
噂のゝ也。見同声ふ為じ。同類相求るもの
ゝゝ。何を見ん人ゝ恩あるゝせんや人
も不世代幸物しゝゝんやゝて世のゝふ
かゝゝ。人も不行。我ふ不祥乃ふあゝ
者ゝ。ゝゝ始て人は不祥ふいゝものも
故ふゝいゝ不ゝ。是ゝゝゝいへゝも人ゝ
ゝゝゝゝ。我ゝ幸世ゝ。天性ゝゝ分と

越て文氏鵬る者を必獨と拓く俄の稽
けまるを鳶を少氏俄ひしいるり我を
只我が分氏宇りて一生愚なるひとを長
天性小慧ふいい物人るとどうやくいかし
為さりけ

田舍莊子巻上終